The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『大鏡』の系譜的研究
Author(s)	石原, のり子
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51849
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　石原　のり子　　）	
論文題名	『大鏡』の系譜的研究

論文内容の要旨

『大鏡』は摂関政治の生き証人として、語り手・世次を、摂関政治の年齢に設定し摂関政治史を語る物語である。そして、道長を起点として、それをさかのぼる形で摂関家嫡流の系譜を認定し、描き出す。〈主流〉と〈傍流〉は峻別されており、その意識は非常に明確である。しかし、多くの先学により指摘されてきたように、道長の栄華を口を極めて褒めたたえながら、ときに批判的な姿勢を見せる。これには如何なる意味があるのだろうか。

世次はしつこいほどに道長の栄華を称賛し、彼の前にはどのような人物であっても、敗れさらずにはいられないと、その強運を言い立てる。しかし、これほどに喧伝されることの裏には、語られない何かがあるのではないか。保立道久氏（注）の指摘するように、万寿二年という年は、「王統の新展開の起点となった年」であり、道長の子どもたちの「兄弟不和が顕在化した年」でもあるのである。しかも、藤原氏物語終末部では、その年には、天変が頻りに起き、妖言が乱れとんでいることが語られており、不穏さがただよっている。それだけでなく、悪霊の左大臣・顕光とその女・延子の怨霊に悩まされ続けている小一条院女御・寛子と、懐妊中の東宮（後の後朱雀天皇）女御・嬉子という、道長の二人の女の死期が迫っていることが暗示されてもいる。つまり、道長の栄華という「望月」が欠け始めていることが語られているのである。そもそも、万寿二年五月に設定された語りの現在は、道長の栄華、ひいては摂関政治の終焉を示唆している。本論文では、これまでの〈主流〉〈傍流〉という枠組みにとらわれることなく、丁寧に本文を読むことで、『大鏡』の新たな読みを提示することを目指す。

第一章「『大鏡』における〈敗者〉の表象」では、所謂〈傍流〉の大臣の列伝を検討し、これまで〈傍流〉と一括りにされてきた人物の中にも、区別があることを述べる。〈傍流〉の大臣たちは、何らかの悪事に対する報いとして、子孫の衰退を語られるグループと、それにあてはまらないグループとがある。そこで、まず、前者のグループに属する大臣列伝を確認した上で、後者に属する列伝の検証を行う。すると、その中でもまた、子孫の衰退がはっきりと描かれているグループと、残る子孫について言及されるグループとに二分できる。中でも伊尹伝と道隆伝は他の〈傍流〉の大臣列伝とは明確な違いがあることを指摘する。

第二章「『大鏡』における「魂」観の再検討」では、〈主流〉の人物に備わるとされてきた「魂」が、〈傍流〉の人物にも付与されていることを指摘し、従来の研究を修正する。また、「魂」同様、怪異体験をするのは主流の大臣のみであるとされてきた。そこで『大鏡』で語られる怪異現象についての記述を詳細に検討してみると、時平と兼家の怪異体験は、主流の人物のそれとははっきりと異なることがわかった。それは、怪異現象を抑えるのが時平と兼家の力ではないこと、また結局二人は怪異を一旦は押さえ込んだように見えながら、その怪異に飲み込まれてしまうことが明らかとなった。また、摂関家嫡流の人物には、神と会話したり、死してなお子孫を守護するなど、「ただ人」ならぬ逸話が語られるという共通点があることがわかった。しかし、その中にあって兼家だけがそれを持たず、道長の父であるにも関わらず、摂関家嫡流の人物とは一線を画す人物として描かれていることを明らかにした。

第三章「『大鏡』における兼家と三条天皇――もうひとつの系譜――」では、道長の父でありながら、兼家が他の〈主流〉の大臣と比較すると特異な描かれ方であることを指摘し、その兼家と強い結びつきをもって語られる三条天皇をめぐる記述を検討した。また、兼家が三条天皇に献上した帯が、三条天皇の鍾愛する娘・禎子内親王に相続されていること、そしてそれが東宮の守り刀として伝わる壺切になずらえられ、三条天皇から禎子内親王へと皇統が続くことが暗示されており、摂関政治に幕を下ろし、院政の扉を開いた後三条天皇へと繋がる、摂関家嫡流の系譜とは別のもうひとつの系譜が透けて見えるようになっていることを明らかにする。

第四章「『大鏡』における帝の〈声〉――一条天皇と三条天皇を中心に――」では、『大鏡』の中で語られる帝の発言に注目し、考察を加える。発言の内容、発言がなされた時期、発言が収められている位置などを詳細に検討することで、『大鏡』における帝の発言についての語りの特徴、そしてそれらが持つ意味について考えていく。殊に、道長を内覧とした一条天皇と三条天皇に注目し、考察することで、前者は道長を憚り、本心を吐露することができなか

った帝としての姿が浮かび上がることを明らかにし、一方、三条天皇は帝の中で随一の発言数を誇ること、そして、ほとんどの天皇が在位中の発言について語られているのとは異なり、三条天皇の発言は東宮時代と退位後に限られているという特異性に言及した。そこには、三条天皇と同じく、二十年を越える長きにわたり潜竜の期間を過ごし、退位後まもなく崩御するという共通点を持つ後三条天皇の影があることを指摘し、この共通点を浮かび上がらせ、二人を重ね合わせるための装置として、三条天皇の〈声〉をめぐる逸話が配されていることを述べた。

第五章「『大鏡』における藤原隆家――実仁親王・輔仁親王を視座として――」では、叔父・道長との政争に敗れた人物でありながら、『大鏡』では非常に高い評価を受ける人物である、中関白道隆の三男・隆家をめぐる記述を取り上げ、その意味を考察する。『大鏡』が執筆されたと考えられる時期には、隆家の血を引く実仁親王が東宮位にあり、その弟・輔仁親王も次の東宮に擬せられていたことを考え合わせ、この二人の皇子の存在に立脚し、『大鏡』を読むことの重要性を指摘する。

第六章「『大鏡』の大臣列伝の再検討――道隆伝を中心に――」では、これまで〈傍流〉として〈主流〉の人物の前に敗れ去るとされてきた大臣たちの列伝を検討し直すことを目指す。〈主流〉の大臣の列伝は、当然のことながら子孫へと繋がる語りがなされる。一方、所謂〈傍流〉の大臣の多くが、子孫の衰退を語られている。しかし、道隆伝では繰り返し、道隆の人柄が称揚され、子孫が振るわないことが惜しまれる。また、道隆の嫡男・伊周は「才」という、〈敗者〉に付与される属性を有しており、三男・隆家は「才」と対置する「魂」の人として描かれている。道隆伝はアンビバレントな語られ方をする点で特異である。また、道隆同様、列伝において、子孫が絶えるとされない、伊尹、公季の子孫は、後三条天皇に重用されていることから、従来の〈傍流〉＝〈敗者〉という読みから脱却せねばならないことを指摘した。

第七章「『大鏡』の皇統――冷泉系と円融系を中心に――」では、『大鏡』の皇統意識について考える。摂関政治史を語ることを目的としている『大鏡』は、当然次の時代である院政期を念頭に置いていることは疑いない。また、摂関政治の全盛期は冷泉系と円融系の両統が迭立状態にあった時代である。そこで、『大鏡』においてこの両統迭立がどのように描かれるのかを明らかにする。冷泉天皇の即位により、師輔を祖とする九条流の繁栄が確固たるものとなり、また、花山天皇の突然の退位により、一条天皇が即位することとなり、外祖父・兼家は摂政となった。冷泉系は、兼家・道長の栄華を保証する存在として描かれていることを述べる。一方の円融系は、まず、円融天皇が自らの立坊に功ある兼家の官位を奪うことを容認し、兼家女・詮子を後宮に迎え、一粒種である一条を儲けながら、その立后を許さないなど、ことごとく兼家の障害として立ちはだかる。一条天皇もまた、道長に内覧を許すことを嫌がり、道隆の孫である敦康親王の立坊を望み続けることが語られるなど、道長の栄華を阻害する存在として描かれていることを指摘する。しかし、後一条天皇は、一転して道長の栄華の礎かつ象徴としての役割を担っており、ここにおいて、円融系の特徴は消え、道長に取り込まれてしまう。そして、三条天皇は冷泉系ではありながら、道長に対抗しうる帝として造型されており、また禎子内親王にレガリア的なるものを移譲しようとすることが描かれていることから、後三条天皇の祖としての姿が浮かび上がる構造となっていることを述べた。

第八章「『源氏物語』と円融朝」では、これまでの『大鏡』の研究に基づいて、『源氏物語』の准拠を探る試みである。円融天皇時代の後宮、補任状況などが、桐壺帝の時代のそれと重なる部分が多いことを指摘する。無論相違する点も多く、そのまま准拠とすることは難しい。しかし、弘徽殿大后の造型に詮子の姿が投影されていることは、帝の第一皇子を産みながら、立后することができなかった点、帝に対する不満から里がちになる点、所生の皇子が即位した後には、政治に介入し世間の非難を浴びる点などから見て、間違いないと言える。また、嫉妬深く、恐ろしい性格で、光源氏の前に立ちはだかる悪役と捉えられがちな弘徽殿大后については、所生の帝と実家を守り繁栄させるという、摂関期の藤原北家の女性に見られる姿勢という視点に立つと、その行動論理が明確に看取できることを明らかにした。

注）　『平安王朝』（岩波新書 469・一九九六年）

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　石原　のり子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　教授	加　藤　洋　介
	副 査　大阪大学　教授	飯　倉　洋　一
	副 査　大阪大学　准教授	合　山　林太郎

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　『大鏡』の系譜的研究

学位申請者　石　原　　の　り　子

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　加　藤　洋　介

副査　大阪大学教授　　飯　倉　洋　一

副査　大阪大学准教授　合　山　林太郎

【論文内容の要旨】

本論文は、平安時代後期に成立した歴史物語『大鏡』を対象として、藤原道長の栄華を賛美する主題とは異なるもうひとつの主題が盛り込まれており、主軸をなす藤原摂関家嫡流とは別の系譜が存在することの意味を明らかにしようとするものである。（400 字詰原稿用紙換算約 400 枚）

第一章では、摂関家嫡流の人物に敗れた敗者の側の人物たちの特徴を明らかにする。彼らは共通して「末」すなわち子孫が絶えるもしくは衰退する、容姿の端麗さへの言及がある、そして「才」ありとされる。その中で伊尹および道隆には、その人柄を賞讃し、子孫が振るわないことを惜しむ記述があるという特徴を有することを指摘する。

第二章では、これまでの『大鏡』研究において藤原道長をはじめ摂関家嫡流の人物に固有の特性であると論じられてきた「魂」の問題を扱う。『大鏡』全体を通して見ると、「魂」の語をもって語られるのは、摂関家嫡流の人物のみではないし、積極的に肯定されるべき価値でもない。「魂」と同じく、怪異体験を有するのは主流大臣の特徴であると見なされてきたが、これも摂関家嫡流人物を保証するものではないことを示す。その上で、道長の父兼家のみが、摂関家嫡流の枠内に位置しながらも、他の人物とは一線を画して異なる形で語られていることを指摘する。この第二章の指摘を受け、第三章は兼家と三条天皇の結びつきの強さが『大鏡』では繰り返し語られ、また三条天皇をめぐる逸話において娘禎子内親王との密接な関係を強調していることを示す。『大鏡』は道長の栄華の絶頂である万寿二年に語りの現在を設定しているが、一方で院政の扉を開く後三条天皇へと繋がる系譜の始祖として兼家を位置づける、摂関家嫡流とは別の系譜を見出すことができるとする。

第四章は『大鏡』が語る天皇の発言を取り上げ、藤原氏による天皇後見の正統性や、摂関家嫡流系譜の祖基経の卓越性など重要な事柄を語らせていることを指摘する。また三条天皇の発言が東宮時代と退位後に集中していることについて、後三条天皇との伝記的相似性を強調する『大鏡』の意図を見出そうとする。

第五章では、道長との政争に敗れた人物である隆家について、『大鏡』が非常に高い評価を与えていることに注目する。隆家の子孫は後三条天皇との間に二人の親王を設け、うち一人が東宮になったという『大鏡』成立時点における政治状況に鑑みると、道長の栄華を語ることとは別の『大鏡』の意図をふまえる必要があることを述べ

る。さらに第六章では、摂関家嫡流ではない傍流にあっても子孫衰退を語らない大臣列伝について検討し、それは語りの現在である万寿二年ではなく、子孫たちが活躍する後三条天皇時代と重ねてみることによって、『大鏡』成立時点の政治状況を反映したものと理解できることを指摘する。

第七章は、摂関政治の全盛期には冷泉系と円融系が両統迭立状態にあったことに注目し、『大鏡』の皇統に関する記述の特徴を数点にわたってまとめている。

第八章は、以上の『大鏡』の系譜や皇統に関する検討をふまえ、『源氏物語』の成立時に近い円融天皇時代の後宮や補任状況などが、『源氏物語』桐壺帝の時代に重なる部分が多いことを指摘し、弘徽殿大后の造型にも円融朝の詮子の姿が投影していることを述べる。

【論文審査の結果の要旨】

摂関政治史を語る『大鏡』が道長の栄華を賞讃し、摂関家嫡流の系譜とそれ以外の傍流とを峻別していることは、これまでの研究の蓄積によって、『大鏡』への揺るぎない評価となっている。そうした状況下にあって、摂関家嫡流をなす道長の父兼家をめぐる記述の特異性や、その兼家との親密さが繰り返し語られる三条天皇あるいは政治的敗者の側にある隆家への高い評価などに注目し、摂関家嫡流とは異なる院政期を見据えたもう一つの系譜を浮かび上がらせたところは、本論文の達成点として高く評価できる。主流と傍流という二項対立的な理解ではない、新たな『大鏡』評価を導く端緒となりうると思われる。道長賞美の視点から論じられてきた「魂」や怪異体験、あるいは人物評価に関わる「末」「才」といった語について『大鏡』全体を見渡した上で再検討を試み、従来とは異なる見解を提示していることも評価できよう。

他方、院政期を見据えたもう一つの系譜が存在することがどのような意味を持つのか、『大鏡』という作品全体あるいは道長賞讃の物語との関係において総合的に位置づける記述が簡略に過ぎ、物足りなさを感じざるをえない。進展著しい院政期を含めた歴史学の成果への言及があれば、より重厚な論の展開が可能となろう。第七章は冷泉系と円融系の両統迭立に関する『大鏡』の問題意識を窺おうとするが、そもそも『大鏡』に両統迭立ということが意識されていたのか疑問である。『源氏物語』を扱った第八章は今後の研究の展開を予期させるものではあるが、やはり違和感がある。『源氏物語』に関する研究史の把握が十全ではなく、論及すべき点に触れていないことも問題である。また全体に自身の論を展開させていく過程において性急なところがあり、説得力を弱める結果になっている。

以上のような問題点を含むものの、本論文はこれまで注目されることのなかった系譜の存在を明らかにし、『大鏡』研究に一石を投じる新たな見解を提示することに成功しており、一定の評価を与えることができると思われる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。